

第5回「調和と共生のまちづくり部会」会議録

日時：平成17年2月11日（金）

午前10時～正午

場所：市役所6階601会議室

出席委員

1号委員 宮本哲

2号委員（各種団体）梶田忠博、河原純子、谷村勇、森尾陸子

2号委員（公募） 井上壽子、岡林扶美子、木下光、高橋功、水谷邦子

3号委員 前中久行（部会長）、農野寛治（副部会長）

欠席委員

1号委員 大北国栄

事務局

企画総務部企画経営室企画グループ長：土井信雄

企画総務部企画経営室企画グループ主査：山口麻子

㈱日本総合研究所

松岡敦子

【土井企画グループ長】

本日の出欠状況でございますけれども、大北委員がご欠席ということで、ご連絡をいただいております。それでは、ただ今から、第5回 調和と共生のまちづくり部会をはじめさせていただきます。それでは、前中部会長、よろしくお願いいたします。

【前中部会長】

皆さん、おはようございます。寒い中にも、窓から外を見ると、何か春を感じられるような季節になってまいりました。これから自然に恵まれた河内長野では春の良い季節になります。それでは早速でございますが、議事に入りたいと思います。

1月30日の第4回部会に引き続いて、基本構想の素案について意見を交換して参りたいと思います。なお、部会については、今日で一応の締めとさせていただいて、次回は審議会となる予定ですので、ご協力をよろしくお願いいたします。是非、色々な意見を言っていただいて、それが次の審議会への案にまとまってくるようにと思っていますので、活発な議論をお願いしたいと考えております。時間は意見交換としては11時50分位までで、12時頃には終わりたいと考えておりますのでよろしくお願いいたします。

それでは、基本構想素案について意見の交換をお願いします。どの部分でも結構です

が、前回、まだあまり取り上げていない感じのある重点施策を含めてよろしくお願いたします。

前回は一応議論をして、その後、また、時間があったので、それぞれ色々お考えいただいたのではないかと考えておりますが。

【土井企画グループ長】

部会長、ちょっとすいません。報告を1つ、前回、大北委員からご質問がございました「犯罪認知件数」について調べたのですが、「認知件数」とは犯罪について被害の届け出、告訴、告発、その他の範疇により、警察において認知した件数ということです。また、「出生率」の件がございまして、最新のものはありませんが、平成15年の段階で合計特殊出生率というのがございまして、特定の都市において、15～49歳の女性が何人の子供を出産するかということを示す数値でございます。それで、本市は1.08人、それから、大阪府平均で1.20人、全国平均で1.29人ということで、本市はかなり低いということです。これは、以前にも申しましたように、生産年齢人口の流出と、それから、ファミリー層の流入が減っているということかと思われまます。以上ご報告いたします。

【前中部会長】

ありがとうございます。皆さん、いかがでしょうか。

【農野副部会長】

今おっしゃった15～49歳の女性の方は、市に何人位おられるのでしょうか。男女関係なく人口で年齢が出ているのと、男女だけでくったものはないのですか。生産年齢人口は平成14年で86,000人位ですか。単純に半分に割ると4万人ちょっとぐらいでしょうか。

【土井企画グループ長】

資料では、15～64歳とあるのですが、83,000人位です。

【農野副部会長】

生産年齢人口で捉えていますね。

【谷村委員】

市保健問題対策協議会の資料では平成16年9月末現在、15才～40才での人口構成比率は31.7%で38,426人と聞いております。

【水谷委員】

生産人口の流出とか人口の減少は、比率とは関係ないと思うのです。考えられるのは、まだ産んでいない世代がもしかすると多くて、実際、49歳でも64歳でも出産された方が数値で上がってくるので、全国と比べてかなり低いということは、1つは子どもの出生率が低いということ、もう1つは、まだ出産年齢に至っていない年齢層の方が多いという、2つの可能性が考えられると思うのですが。もし、出産がしにくい条件ということだったら、やはりこれは大切な問題ではないかと。

【農野副部長】

「将来の都市像とまちづくりの目標」のところの、12ページの「環境調和都市」の2番目のところなのですが、「市民のライフスタイルが環境への配慮に基づくものとなるようなまちづくりを進めます」とありますよね。こちらに住んでおられる方のライフスタイルとはどのようなものを、もう一度考えてみたいと思います。

【前中部長】

何か市の方でこういうことに関するアンケートされたということはあるですか。

【農野副部長】

「資源循環や環境負荷低減を一層強化するとともに、自然との触れあいを通して」までは何となくイメージ出来るのですが、あとの1行がイメージ出来ないものですから、こういう書き方でいいのかなどか。

【前中部長】

表現が少しわかりにくいと。

【農野副部長】

そうですね。恐らく、ライフスタイルと環境との調和ということなのだろうと思いますが。

【森尾委員】

ちょっと、関連性があるかどうかはわからないのですが、河内長野には特にこれといった地場産業はないのですけれども、お祭などは観光の活性化の中に、大いに入るのはないかと。今日、私は初めて、びっくりして見たのです。こういう展示は見たことがなかったので。お祭ということはどこかに出ていたように思うのですけれども、あの言葉を強調して、河内長野市のお祭を宣伝なさってはどうかと思いました。

それから、全然違う話なのですが、「共生共感都市」の中に入ると思うのですが、地域の福祉についてですけれども、地区福祉委員会が全小学校区に立ち上がっておりま

す。その福祉委員は何の資格も無いから、どの程度の仕事をしていいのかわからないというご質問があったように聞いているのですけれども、地区福祉委員というのは、民生委員とか保護司、人権擁護委員、地域の主立った団体の長である人たちが全部入っているわけであって、地区福祉委員自身が何かの資格を持ってどうこうということではないのです。つまり、地域の人間が皆に対して目を届かせることであって、一対一の相談役ではない。何か相談事が起きた時は、それぞれに配置している人権の方たち、「そのことについては 〇〇の先生にご相談なさったらいいですよ」など、どこに行ったらいいとか誰に相談したらいいとか紹介する立場にあるわけです。地区福祉委員会に対しての啓発が行き届いていない面もまだあるのですけれども、その点をこの際、是非知っていただきたいと思います。15の地区福祉委員会をつくるために、私どもでは2年間かかりました。大阪府で一番最後に出来たものですから、随分お目玉を頂戴したのですが、その費用については、大阪府からは50万の補助金が出ています。だから、誤解があってはいけませんので、地区福祉委員とそういう方達とは、どういう差があるかを書く必要はないのですが、地区福祉委員の活動というものを、もう少し宣伝していただけたら。昔の隣組のように気楽に話ができる相手であることを認識していただきたいと思っております。

【前中部会長】

ありがとうございます。まず、最初のお祭の部分は当然ですが、その他にも、実は、この河内長野にはいいものがいっぱいあるのだけれども、身近にあるものだから、ことさらそれを認識をしていない。ことさら言うのも気恥ずかしいという感じもあるでしょうし、ついついそういうものを見過ごしてしまうというところがある。そういう地域の宝や資源をしっかりと認識をして活かしていくということ、意識的にそういうことを心掛けることが必要だということ。それから、色々なものについても、仕組みがそれなりに出来ている部分もあるのだけれども、それが知られていなかったり、相互の関係が連結していなかったりということがある。その、今ある仕組みをさらにうまく動かしていくことも非常に重要なことだと思うのですが。

【土井企画グループ長】

直接ライフスタイルとは関係ないのですが、ご参考までに、市民が市のまちづくりに対してどういう満足度をされているかという統計がございまして、まず、自然環境分野の満足度というのがございまして、個別にもあるのですが、総合的な評価としては、「非常に満足：2.2%」、「やや満足：26.0%」、「普通：48.7%」、「やや不満：14.2%」、「非常に不満：2.2%」、「わからない・無回答：6.2%」となっています。

それから、健康福祉分野に対する満足度ということで、これも、総合評価だけで申し上げますと、「非常に満足：1.2%」、「やや満足：10.9%」、「普通：49.9%」、「やや不満：18.7%」、「非常に不満：3.0%」、「わからない・無回答：16.2%」となっています。

それから、教育・文化分野にいきますと、「非常に満足：1.3%」、「やや満足：11.7%」、「普通：51.2%」、「やや不満：15.7%」、「非常に不満：1.7%」、「わからない・無回答：18.4%」となっています。

それと、安全・安心の分野では、「非常に満足：1.3%」、「やや満足：12.7%」、「普通：60.0%」、「やや不満：18.5%」、「非常に不満：2.4%」、「わからない・無回答：5.1%」となっています。

この後、産業や都市基盤についてもあるのですけれども、調和と環境分野では、この程度であると思うのですけれども。以上です。

【前中部会長】

ありがとうございます。今の数字をパッと見ますと、大体普通というところでしょう。非常に満足の方も少ないし、逆に非常に不満もそれほどいらっしやらないというところが特徴で、自然などについては満足の方がやや多いというところですね。

【梶田委員】

市長さんの受け売りですけれども、まず、はじめに、2ページの「まちづくりの歩み」という中で、道路のことが色々載っているわけです。ところがこの素案では、道路整備についてはあまり詳しく出ていない。市長さんが先日の新年互礼会や他のグループで話された時、高速道路のことを話されていました。「やはり、どこのまちでも発展するためには道路網がしっかりしてなくてはいけない。現代は車の世の中ですから、問題もあるが高速道路があることによってアクセスも便利になるということ、何とか河内長野にも高速道路をつけたらいいと思います」というようなお話なのです。役所では、そのような話は出ていませんか。

【土井企画グループ長】

直接的には出ていません。ただ、当然、願望というのはありますから。産業や経済的に考えますと、ここでも議論されていますけれども、なかなか難しいところがあります。願望的に高速道路が来れば起爆剤になるなという、そういう意味であると思います。

【梶田委員】

この間、南阪奈道路が出来ました。羽曳野からずっと高田まで、ブドウ畑と山の中を走っているのです。どこに活性化の問題点があるのかな。いずれは五条まで伸びるのでしょうかね。多分そうだと思いますけれども、そうしますと、奈良県はいい、あと、太子町の方は、それも産業道路としてもどうかなという感じもするのですけれども。河内長野はどこに出るにも道路が少ないということで、交通渋滞の原因になっているわけですし、そういう意味では、高速道路も考えてもらってもいいのではないかという感じも

するわけです。市長さんが一生懸命言っておられるのなら、市の方でも計画立てていただかないといけないと思ひまして。ちょっとここへでも入れておいてもらえたらいいという気もするのですけれども。

【前中部会長】

基本的には都市の基盤として必要であるということは間違いない。

【梶田委員】

難しいと思うのですけれども。

【前中部会長】

その上で、相互のことを考えながら、どういう道路をつくっていくかとか、どう利便性を高めていくかとかいうことですね。

【宮本委員】

私は違う立場なのですけれども、アクセスは大事だというのは当然そうですし、そのことはもう少し盛り込んだ方がいいかと思うのですけれども、それが高速道路となると別問題で、考えなければいけないことは沢山あります。お金が厳しくなってきた大元は、全国各地で高速道路のつくり過ぎだと言われてますね。また、つくったならつくったで、それなりに色々と考えていかなければいけない問題も。当然そこにはリスクも発生するわけですから。高速道路が必要なのか、今ある道路、例えば、外環状線などを早く整備する必要もあるだろうし、和歌山の方に行くバイパスもあと何年かかるかわからない状況でもありますし、財政的にはそちらに先に投入しなければいけない状況であります。そういった具体的な問題は別にしても、やはり、まちの中も含めて、アクセスをもう少し充実していかなければいけないという、そういう大きな理念であると思ひます。

それから、先ほどから、人口の問題が少し出ていたと思ひますけれども、10 ページの「まちづくりの理念」の中で、「人口減少という大きな時代潮流に敢えて逆らわず」とあるのですけれども、先ほどデータをご紹介いただいたら、平均よりかなり低いわけですね。「大きな時代潮流」とは何かということなのですけれども、全国平均よりも少ない状況で、その流れで、それはそれでいいのかと、この文章からは受け取れてしまうのです。その後とか、色々具体的な中身は、例えば、12 ページの 3)では、「本市は、人口減少に加え少子高齢化が全国平均以上に進展することから」と課題にも掲げているのですが、初めにいきなりこの文章が出てきているので、この表現でいいのかという感じが少しするのです。

ここでも、「少子高齢化」という言葉が何回も出てくるのです。前々回にも議論されたと思ひますけれども、ただ、少子化の問題がちょっと少ないかなと思ひます。もう

少し少子化の問題の提起あってもいいのではという気がするのですが。

【前中部会長】

ありがとうございます。人口減少については、今まで皆さん方のお話を聞いていて、積極的な意味で、減るのがいいのだという、そのような意見はありませんよね。基本的に多い方がいいのだけれども、それは現状では色々問題があって難しいという認識ですよ、ちょっと変な言い方になりますけれど。例えば、非常に人口が多くて過密だから減る方がいいという意見は、今まではございませんね。基本的に、「増える方がいいのだ」、「できれば増やしたい」というのが、基本的なお考えだと思うので、こここのところの表現は、確かに、「人口減少に敢えて逆らわず」というのは、圧力が来た時に何かそれを利用するという表現なので、「人口減少という時代の潮流を前提として」とか、何かそれぐらいの言葉を。

【宮本委員】

課題としていかなければいけないのは確かだけれども、課題を除外していいという意味ではないという、そう捉えられるような感じがするのです。

【前中部会長】

人口減少というのが非常に大きな課題であるというのは基本認識で、その上でどうするか、どう出来るかという。だからと言って、簡単に、人口を増やすということで解決するようなことではないということは認識しているのだけれど、何とかしたいという、そこが大きな問題なのですよね。

【梶田委員】

地域的に見ますと、例えば、あかしあ台1丁目と2丁目があるのですけれども、2丁目が85戸ぐらいですかね。あかしあ台が最初に来た時分は、幼稚園に行く人が、非常に多かったのです。高齢化率が一番低いところなのです。2%かそれぐらいいはずです。今は、2丁目は子どもでいっぱいなのです。ですから、そのまちで、少子化と言ってもピンと来ないでしょう。そういうこともあると思うのです。だから、もっともっと増えていただきたいのですけれども、だから、若いお母さん方に頑張っていたきたい。幼稚園の送り迎えも非常に多いです。そこでまた、色々対話があるのです。子育てのことなど相談しているようです。

【前中部会長】

新しい開発が行われると、そこで結婚された方に子どもさんが生まれていく。しばらくするとピークがとどまるのです。20年少し経つと、そこで生まれたお子さん達がそこで結婚されて、また、少し子供が生まれるという、20年ごとに大きな波が来るという開

発の時間間隔で、それが相互にずれながら、まちの中で起こっていけば続いていくのですけれども。

【梶田委員】

これからは老人クラブがいいですよ。

【水谷委員】

全体を通して、高齢化や高齢者という言葉が非常に沢山出てくるのですが、逆に、子どもや教育とかの記載が少ないように感じます。先ほど言われましたように、やはり、課題であるというところに載せていただくということが大切ではないかと思っております。

【高橋委員】

前回は申し上げたのですけれども、やはり、人口のことにこだわりますと、7ページの下の方に、「再び人口を増加させることは…現実的ではない」とか、8ページで、「人口の『規模』は小さくなくても」とか、それから、先ほど宮本委員もおっしゃったのですが、10ページの最後で、「人口減少や少子高齢化、経済の低迷、財政の悪化など」とありますけれども、人口の減少を前提にしているのです。人口が減ってきたから税収が減る、だから、行政サービスが低下してくるといふ、そういう大きな流れがあるような気がして、我々一般市民はありがたくない流れの文章になっているのではないかというのが1点です。それから、データで言いますと、平成27年が11万人となっている根拠がよくわからないのです。前回、お聞きしましたら、国の社会保障人口問題研究所の資料と聞きましたが、これを見ますと平成27年には122,743人となっているのですが、これは何かアレンジされたのでしょうか。

【土井企画グループ長】

それを参考にして出した数字です。

【農野副部長】

少子化は致し方ないという判断の下で、人口の量的な問題はあまり前面に出さずに、生活の質であるとか、あるいは、地域コミュニティの中の様々な資源をどう活用しながら、少ない財政資源の中でやりくりしていくか、そういう発想でまず行きましょうと。そして、結局、生活の質が高まったり、コミュニティが活性化することによって、ひいてはこの市の魅力が高まって、流入してきてくださる方もおられるかもしれないし、定着して生活していこうという方が増えてくると。そうなるとう人口の増加も見込めるかもしれないけれども、国全体の流れとして、少子化であることは間違いない。そういう辺

りが、部会でもまだまだ理解が得られていない部分があるかと思います。

まず、生活の質をどうするかという点について、そして、地域の中の様々な資源の活用、循環、そういったことを、今回の4次の目標では、テーマを置きながらつくっていくのだからということが明確に前に書かれていますよね。ですから、もう1度、振り返って見ますと、ライフスタイルのところを見ると、まず、一番最初の方の部会でも出たと思うのですが、持ち家比率が高くて収入が高い人が非常に多い。そして、団地に住んでおられる方が高齢化しつつある。総合評価を見ましたら、自然環境と教育を評価しておられる方が多い。保健福祉や安心安全については、まだまだ、もう少しと思っておられる方が2割から3割ぐらいおられると。自然・教育の評価が高くて、保健だとか、健康だとか、福祉だとか、安心安全については課題があると。河内長野市の特性を見ましたら、離婚が増えてきている、そして、夫婦のみの高齢者世帯が多くなってきている。一方、自宅の購入や相続で流入してくる方が結構おられます。そして、自宅を持っておられる方は、通勤時間が長い。どのような仕事についておられるかという、サービス業などの第3次産業についておられる方が圧倒的に多い。そういうことを考えてみたら、今、現役の方が時間を持てるということ、つまり、現役の方は時間がなさそうなので、今度、次世代育成対策推進法の中で、企業が主体的に、家庭と働き方を両立するようなことをやらなければならなくなったのですが、その辺りがどれくらいやれるのが、少し見ものだなと思います。

こちらでも、だんじりなどの地域の行事が非常に活発であります。そのようなところに、時間を持てた現役の人達が、どのように地域の様々なコミュニティに入っていけるだろうか。そういうことも考えなければならないと思うのです。家のある人となない人がいます。この市の中にも生活問題を抱えた方がおられるのです。また、所得の多い方と低い方がおられます。特に気になるのは、離婚の増加に伴い、1人親家庭、母子家庭はまだまだ増えると思われれます。

そういう風に見ていくと、地域の中で、先ほどおっしゃった地域福祉委員、地元のそういう役職を担った方の協議会のようなものを地域の中でやる。そして、ネットワークをつくって、地域の様々な生活問題に取り組みながら活性化していく。小地域ネットワーク事業ですか、そのような内容のことがやられているのですが、そういう方たちが、もう少し地元の方に普通に見えるような形で存在するにはどうすればいいかですね。地域の中で様々な人たちが一緒に暮らす仕組みと、そして、自然との調和などを考えると、どちらかと言うと、保健や福祉、安心安全や、地域のコミュニティ、様々な生活を送っておられる方がどうすれば一緒に生活していくことが出来るかということが、僕は少しだけ見えてきたような気がするのですけれども。

【森尾委員】

今おっしゃった通りで、「少子高齢化」という言葉にかき回されているようなところが

あります。少子高齢化で、「あなたは高齢化してはるから」という決め方は、今、出来ないと思うのです。高齢化の比率の方が高い団地が増えていますので、実際に見ていますと、若い人たちには時間がありませんので、「高齢者だ」と世の中で言われている人達が、実際はまだまだお元気で、若い人以上のことをなさっているのです。イベントがあると先頭に立って、たこ焼きを焼いたりしている人はお年寄りなのです。

市がするべき、在宅老人への配色サービスとかを、市では予算がなくて、お出しにならないのを、シルバーボランティアの人達がやっているのです。だから、単に、「あなたは高齢化であるから」という決め方は出来ないのであって、そういう言い方はあまりしてほしくないと自分も含めて思います、ひがみで言っているのではなくて。少子というのは時代の流れで仕方がないと思うのです。少子化という問題については、水谷さんもおられるのですが、私どもは、「女性問題」と最近出ております。子ども達を沢山産んで育てていくためには、環境を整えなければ、お母さん達が安心して子供を産めないという問題もあります。そこまで話が行ってしまいますので、少子高齢化といっても、少子というのは自然の流れというか、お2人がお決めになることであって、高齢化に関しては、強調して、「あなたは高齢者」という考えはしてほしくない、私は日頃から考えております。現に、老人会も非常に活躍されておりますから、決して高齢化とは言えません。

【水谷委員】

同感です。先ほど申しましたように、特に13ページの中程で、「高齢者が増加し、これまで以上の安全安心対策を必要とする層が増加すると予想され」とありますが、その方々に対して非常に失礼かと思えます。お荷物が増えるというニュアンスが言葉の端々から感じられます。ちょっと表現を考えなければいけないかなと感じます。

【農野副部長】

12ページの、「共生共感都市」の中で、「少子高齢化、生産年齢人口の減少による社会保障制度の破綻が懸念される中」というのを、今おっしゃられたように、「地域の中の様々な方が生活の質を高めるために連帯しあうのだ」というような、積極的なものを前に出したいですね。

【梶田委員】

高齢者がこれから差別されるような、老人福祉が置いてきぼりされるような、そのような感じを受けています。

それと、大阪府でも全国でもそうですけれども、今、森尾さんにおっしゃっていただいたのですけれども、健康づくりというのがあるのです。ですから、寝たきりや介護をなくそうということで、年寄りがやれる運動を推進しようと。今まではゲートボールや

グラウンドゴルフであったと。これから先は、ペタンクもあれば、あるいは、スカイクロスなどもあります。そういう中で健康づくりをやっていきましょうと。それに対して、厚生労働省も相当な予算を組んでいるのです。ところが、厚生労働省がいくら予算を組んでも、府と市が3分の1ずつもっていますので、府と市で予算を組んでいなければ実行出来ないのです。忘れられてしまうと。厚生労働省は4億2500万円も出しておいて、「残るのなら返してくれ」と、今度は減っていくわけです。ですから、府と市で、そういう風なものも一緒にもってほしいです。河内長野の場合は、常に出してもらっているのです。そうすると、1回で30万円いただけますので。市が10万円出すと、20万円くれるのですから、それでやっていけるのではないかということで、どんどん進めているのです。そういうことから、やはり、高齢者の体が弱って、寝込んで、介護にかかろうと思っても、今度は介護保険も見直しがありますから生きていけなくなります。

【農野副部長】

高齢者だけではなくて、障害を持っておられる方も非常に厳しい状況に置かれています。扶養責任のある方でも、親に収入があれば、親が1割負担をしないといけないのです。行政が今までやってきたことが、自己責任という形に移り変わってきているのです。

母子家庭にしても、「5年以上支給されていると減額しますよ」とか、「別れたご主人から養育費を貰っていると、それは、収入と認めますよ」とか、だんだん厳しい状況になってきています。お金の面に関しては全て厳しくなっています。

【梶田委員】

特養ホームや老人施設は今までは介護保険で1割負担でした。施設に入る場合は、扶養家族にならずに単独の人達になるわけです。そうすると逆に生活保護も頂戴できるという、一番安い形でいける。ところが今度の見直しで、食費は全部負担しなければいけない、住居費は負担しなければいけない、どなたが一体対象になるのかなど、不思議に思うのです、相当高くかかりますから。その辺もどこかで見ておいていただけたらという気がします。

それと、11ページの「協働のまちづくり」の一番下の方に、「市民から市民へサービスを提供する仕組みが重要です」とあります。これはもう少し具体的に、「市民のボランティアでもって共に働いてくださいよ」という意味合いで、地方分権がからんできている気がするのです。そうすると、もう少し具体的にはっきり書いていただく方が、「市民から市民へサービスってどういうことなのか」ということがありますので、その辺も考えていただければありがたいのですけれども。むしろ、「地方はこれから先、市民の協働＝ボランティアがなかったら、やっていけないのだ。だから協働してください、お願いします」という風な形を出していただいた方が、スカッとするのではないかという気がするのですけれど、いかがでしょうか。

【森尾委員】

今のことにつきましては、市の図書館協議会というのがありまして、「図書館でも、どんどん仕事をボランティアの人にしてもらっています」と、こういう風におっしゃるのです。そうしたら、中におられる委員は、「そういう仕事をやってみたいけれども、どこに行けばやらせてくれるの」ということになりまして、今、会長が言われたように、何でも市の中の情報を、「こういうのがありまして、これについては、こちらに申し込んでくれはったらいい」とかいうことを市民にわからせたら、それこそ、市民から市民へのサービスということが交流するのではないかと思います。やりたくてもやり方がわからないという人が、ものすごく多くおられます。それをはっきり感じましたので、今もおっしゃいましたので、そのことを強調したいと思います。

【農野副部長】

大学で図書館司書の資格が取れたりするので、実際に持っておられる方も眠っていると思うのです。

【森尾委員】

そうですね。申し出ていただいたら、日を決めて講習もしております。申し出た方も、「どこに言うのですか」と、皆さん言っておられますので。河内長野というのはそういう啓発や広報が少し遅れているのではないかと改めて思いました。

【宮本委員】

情報化について色々やってきて、市もどこかでそれを書いているわけなのです。発信していないわけではないのですが、実際に市民のものにはなっているかと言えば、必ずしもそうではないというのは、おっしゃられた通りだと思うのです。ITとかでごまかされてしまったらいけないので、もっと市民が情報を共有出来るような方法を絶えず研究していかないと、広がっていかないという風に思います。内気になってしまうといけませんので、これからもっと、「市民から市民へ」ということ、ボランティアを広めていこうとすれば、一番大元の課題になっていくのではと、今のお話を聞いて感じました。

【井上委員】

ボランティアの件でもそうなのですが、私達の会議でも、一応、子ども達の活動の場とか、障害を持っている大人の方たちのレクリエーションの場とかを企画して、どんどんやっているのですけれども、やはりその時に、ボランティアをお願いしたいことが色々出てくるのですけれども、現状では、担当者が大学、専門学校、高校等を走り回ってお願いして回って、やっと人数が揃うという感じですので。ボランティア推進協議

会も出来たばかりなので、これからどんどん意見を言わしていただいて、ボランティア協議会の方でも、市内の各高校や大学だけではなく、近隣の大学や専門学校にも、推進協議会の方から声を掛けてくださるようになったのです。お声が掛かっているのです、必要な時には、今までよりは応じてくださる方が少しは増えてくるようには思うのですが、その辺で協働というのはなかなか難しい問題です。

【農野副部長】

私も以前、児童福祉施設に勤めていまして、いま大学にいますけれども、ボランティアを受け入れる現場と送り出すという両方の現場を体験しているのですが、何が一番大切かと言うと、コーディネートしなければならないのです。啓発して、そして連絡して、調整して、さらにボランティアを育てなければならないのです。何をしてもいいかということを引きちゃんと伝えなければいけないし、「こうするんですよ」ということも言わなければならない。それを全部、1人で担わなければならないのです。大学も一緒に、現場でも1人です。だから、ボランティアはボランティアでもものすごく大事なのですけれども、それをどのように活用出来るかというキーパーソンがものすごく大事なのです。地域や施設や機関に、そういう人がおられるかどうかが大前提です。また、情報の流れがもう一つ良くないという話だったのですが、一番確実なのは口コミだということです。例えば、子育てサロンのようなものが多くるところで立ち上げられていますけれども、参加される方の多くは口コミとか、友達からの誘いとかいうのが多いのです。地域の中で行政や民間の情報をしっかり持っておられる方がおられて、そして、ルートがあって口コミで伝えられるという仕組みが一方では大事なな感じがします。ですから、「市民から市民へのサービス提供」の仕組みの中で一番大事なのはコーディネートを誰がするのかということと、そして、情報を口コミで流すための仕組みみたいなものが、町会であるとか自治会であるとか、何か社交場みたいなものとか、これからもちょっとした工夫が必要なのだろうなという感じがします。

【木下委員】

情報の共有というのは、例えば、市が、情報化社会の進展でインターネットを使ってなど、手段を広げて市民に情報を提供するというのは情報の共有という点では、根本的に大事だと思いますが、私も含めて、聞いて初めて、計画の存在を知る人も多いと思いますし、手段を広げるだけでは、無関心な人には届かないと思います。それと、情報の共有というのは、一方的に市の情報を市民に提供するだけでなく、市民の不満や、「こうしてほしい」という要望も、逆に戻す必要があると思うのです。以前、あるホテルのオリエンテーションに参加した時に、不満に思ったことでも、ホテルに直接言わずに帰られる方が96%もいると聞き、たった4%の人が、ホテルに直接言ってから帰るという状況なのだそうなのですが、それはまちづくりにもあるのではないかなと思います。4%

の意見も貴重なのですけれども、言いやすい環境をつくるとか、ホテルですと、例えば、「食事がお口に合いましたか」と聞くとか、市民の意見が届きやすい環境づくりを行い、逆の情報の共有も必要ではないかなと思いました。

【前中部会長】

ありがとうございます。情報というのは、本当の意味で役に立つためには、やわらかい情報の伝わり方とネットワークの部分、たとえ、インターネットとか市の書類で出てくるといふ物とやわらかいものの両方がうまく重なり合って機能をするといい、そういうことが大事なのですね。どうしても、インターネット時代になってくると、そういう最新のものばかりに目を奪われてしまうのだけれども、それだけでは、本当のところの人と人の情報の伝わり方、あるいは、その具体的な活動に結びつくところにはなかなか行きにくいところであると思います。

【農野副部長】

今、木下委員がおっしゃられたのは、13 ページの「自立協働都市」の文章に付け加えられるようなことかなと。

【前中部会長】

「施策に反映される多様なチャンネル」というような意見の。

【農野副部長】

このような表現がいいかどうかですね。

日本語というのは便利というか不便というか、自立協働都市の記述にしても、主語がないのです。「情報交流を充実します」、そして、「多様なチャンネルを構築する」ところなどは、これは、行政がやるのか、それとも、市民と行政がやるのか、市民が中心となってやるのか。

【梶田委員】

広報がありますよね、河内長野の場合も。それで、広報で色々な計画を掲載されていますが、短くて何が何か分からなくなって、時と場所だけで終わってしまうと。主旨が1つも出てこないという場合もあるのです。紙面の都合もあるかと思うのですけれども、本当に市民と共有する情報なら、もう少し詳しいものを載せてもらわないと伝わらないのです。そのようなことも、これから先、研究していただけたらと思うのですけれども。

【水谷委員】

11 ページの「協働のまちづくり」のところで、「行政が提供する画一的なサービスだけ

では」というところに、かなり引っかかりました。「行政が画一的である」ということを変えないのだというような感じがしますが、そうではなくて、現状を変えていかなければいけない、変えていこうという行政の姿勢がちょっと足りない気がします。例えば、「行政だけが市民にサービスを提供するだけでなく、市民から市民にサービスの提供」する、その中に、市民から市民の同じ市民の団体を育てるために、行政としてどういう援助が出来るか、サポートができるかということが必要だと思います。細かいことですが、市民活動やボランティアの活動をいくつか見て参りました。その中で、手弁当でやっておられる団体が沢山あります。少なくとも、そこで、実費である交通費、高いです、河内長野は、遠いところから出てこられて、そういうことさえ自弁でされておられる方、それが非常に負担であるのです。時間と労力は提供するが、持ち出しをしているところを期待しているような、行政はお金がないから丸投げをして、「そっちでやってちょうだい」というようなのではダメだと思うのです。やはり、市民の力も借りるけれど、同時に行政として出来ること、それは、金銭的な財政の面であったり、場所の提供であったり、他にも色々と考えられるかと思うのですけれども、そういったものを行政の方がちゃんとしていくのだという姿勢をここで感じたいと思います。市民が安心して生きるために。

【農野副部長】

ただ、書き方としてこんな書き方にならざるを得ないと思うのです。画一的なのが妥当かどうか分からないのですけれども、行政が何かをやると書くとそこに説明責任が生じるのです。ところが、民間の活動というのは、自分がお弁当を持ちだして何かをやる、それが誰かに迷惑をかけない限りは説明責任がないのです。だから、市民活動の良さというものをどう活かすかということが大事なのです。ボランティアというものは、それこそ一瞬にして国境も越えてしまいますから、弾力性や柔軟性がある。それをどう活用するかが、1つの問題であると思います。

行政の限界というのは確かにあると思います。これだけ色々なニーズが出てきている中で、全てのことに説明責任が果たせるような状況ということになると、かなりは限られてくると思うのです。同時に、民間のサービスなり、民間の人達が活躍すると、どこかで必ず沢山サービスが集まるところと届かないところが出てくる恐れがおこるわけです。それを必ずきちんと誰かが見ていることは絶対必要なのです。しかし、「行政が提供する画一的な」という部分については、確かにおっしゃる通りで、表現を変えた方がいいかもしれませんね。

【水谷委員】

13 ページの下から 4 行目「引き続き厳しい中」というのが、ちょっと意味がわからないのですが。何が厳しいのでしょうか。

【宮本委員】

財政でしょう。

【農野副部長】

書きづらかったのでしょうかね。

【前中部会長】

この中で、色々なことが書かれているのですけれども、部分部分によって主語がマチマチになっているのですね。総合計画が一体、基本的に誰がどういうことをしようとするのかという。

【宮本委員】

その視点で見直すと色々出てきますね。

【高橋委員】

最初の時にも言ったのですけれども、国がやるべきこと、市がやること、ボランティアがやること、個人がやることがあると思うのですが、部会長がおっしゃるように、主語がはっきりしていないところが沢山あるのです。きれいなことがいっぱい並んでいるのですけれども、我々一般市民から見ると、「じゃあ一体何をしてくれるのか」、「何をすればいいのか」わからないところが多いのです。多分、施策の方で展開されるのでしようけれども、この辺の書き方をもう少し検討していただければと思います。

それと、やはり、難しい言葉が急に出てくるのです。例えば、15 ページの下のところの(1)で、「定期的な進捗と確認とフィードバック」のところに、ここにいきなり、「行政評価システム」という言葉が出てきているのです。これは、後に用語集みたいなものがあるのでしょうか。ちょっと、これは、一般の方が読まれてもわからないかと思うのですけれども。例えば、8 ページの下の「活動人口」という形で、(＊)をつけて説明しているのですが、そういう形で、情報提供ということを、もう少し丁寧にしてほしいと思います。先の話ですけれども。

【土井企画グループ長】

形式をどのようにするかは決まっていますが、最終的には何らかの形で入れていきたいと思います。

【高橋委員】

もう 1 つ、私は公民館で色々な活動をさせていただいているのですけれども、核になるものとして、公民館は大事だと思うのです。色々なクラブを主催して、皆さんが集まってこられて。そうすると、そこを核として、色々な情報提供や活動の場の 1 つの核として、活用されたいと思います。我々が行きますと、色々なパンフレットが置いてあって、非常に役に立つのです。そこで、パンフレットだけではなくて、行政の説明責任として、身近な公民館で説明会を開くなど、決め細やかな情報提供の 1 つの場になるのではないかと思うので、もう少し活用出来るのではないかと思います。空いている時もあり、もったいないと思います。

【梶田委員】

すいません、ちょっと今、気が付いたのですけれども、6 ページで、「地方分権の進展と財政悪化」になっているのです、書き方が。地方分権、交付税の問題など、色々あるかと思いますが、税金が減ってきたというのもわからなくもないのですけれども、中に書いてあることは、「本市の税金は減少しています」というのです。悪化なら減少より悪いのです。もう悪いからどうにもなりませんということならともかく、「悪化」はちょっと厳しいと思うのですが、どうでしょうか。

【前中部会長】

表現としてですね。

【梶田委員】

はい。「そんなに悪いのならもうちょっと月給も減らしや」ということになってくるのではないのでしょうか。

【農野副部長】

河内長野市は税金が高いとかいう話はあるのですか。

【梶田委員】

毎年確定申告に行っていますが、変わってきています。

【前中部会長】

基本のものは変わっていないのではないですか。

【梶田委員】

特別配偶者控除がないでしょう。高齢者控除がないでしょう。大きいですよ。それだ

けで 88 万。1 割なら 88,000 円、2 割ならその倍です。今年度はまだいいのですけれども、次の年度から大変ですよ。どないしようかなと。

【河原委員】

結婚前、国民健康保険に入っていたのですけれども、富田林で払っていた 20 歳の時は 1,600 円で、その次に大阪市内に行ったのですが、その時は 300 円もかからなかったのです。とても値段が違うんだなあと思い、今度は河内長野市に来たのです。そうすると、その時は、普通の 1,600 円だったのです。昔は市によって変わっていたのでしょうか。

【梶田委員】

ごちゃごちゃいっぱいあってわからない。

【河原委員】

娘が今、美原町で子どもを保育園に預けているのですけれども、堺市になると保育料が上がります。娘は美容師で河内長野に働きに来ているので、孫を預けるのであれば、河内長野で預けてもらった方が、子どもが熱を出した時などは、私自身が迎えに行きやすいので、河内長野で探そうかと思ったのですけれども、税金を納めている市町村の保育所に入れなければいけないということを言われたのです。以前は、お母さんは働きに来られている場所の保育所に預けるということが、何年か前までは可能であったのですが、それが出来なくなったのです。ですから、娘としては、親の勤め先の近いところに子どもを預けておいた方が、何かあった時にすぐに飛んで行けるけれども、住んでいるところと働いているところが離れていると、電話がかかってくると、わざわざそこまで行かなくてならないということがありますので、そこをもう少し、色々なところで考えていただいて、子どもを持つ女性が働きやすい環境をつくっていただければと思います。

【前中部会長】

恐らく、実際的な生活の範囲が市のレベルを超えている部分が随分沢山ありまして、それについては広域的な部分で考えていかないといけないと。相互の協力、住民との協力、広域的な行政という分野についても。

【農野副部長】

先日、阪南市に行った時に、リサイクルの店があったのです。きれいにリサイクルして販売しておられたのです。ですから、チャイルドシートなど、一定の期間しか使わないものなどはリサイクルすべきものなのでしょう。

【河原委員】

河内長野ではありますね。子どもの製品のリサイクルね。

【農野副部長】

使えるようにきれいにして、リサイクルできるとよいですね。

【河原委員】

お友達同士では出来るのですけれども。

【農野副部長】

友達がいない人もいますから。

【宮本委員】

広域的な話は、13 ページの下の方に書かれていることになるのでしょうか。公民館の重要性、必要性はどの辺りで読みとればいいのか、ちょっとわからないのですが。

【水谷委員】

生涯学習という点ですよね。公民館が生涯学習の拠点であったりするのですが、学ぶとか教育というのが、ちょっとないのかなという気がするのです。学ぶということは単に学歴というのではなくて一生涯のことですよね。その部分に対して、それを快適にしていく。それは、隣の小学校や大学などの情報の交換であるとか、学ぶという視点での計画みたいものがほしいなと思います。

【農野副部長】

公民館やコミュニティセンターなど、既存のハード施設の見直しというか、ハードの新しい建築が難しい中で、既存の施設をどのようにうまく運用、再利用するのかということ。活用性をどこかに入れていただきたいと思います。「共生共感都市」ではどうでしょうか。

【水谷委員】

市内には千代田女子短大がありますけれども、隣接のところからも出張講座みたいなものが、市内で受けられれば嬉しいのですが。

【前中部長】

大学としてはつくっているのでも声をかけていただければ。

【農野副部長】

高校の出前授業があって、高校からのオファーがあって、「高校生を相手に色々な話を
していきましょう」というのが、結構あるのです。南大阪コンソーシアムというのが立ち
上がっているのですが、啓発が十分でないのかもしれないですね。

【梶田委員】

生涯学習の関係がどこにも出ていないので、12 ページの「元気創造都市」というのが
ございますね。その基本目標に「生きがいくりの充実」があります。その中に生涯
学習の充実を含めれば、生きてくるのではないですか。せっかく、キックスに生涯学習
の施設が整っているのですから。

2月13日にラプリーホールの小ホールで、「すこやか長寿」というのをやるのです。こ
れは、NHKがやります。河内長野市の50周年事業ということでNHKとタイアップし
て。ただし、河内長野では、会場を用意するだけでやっているわけです。広報にも出て
いるはずですが。先日やった「BS日本の歌」は、応募が12,500通きました。生涯学習で
やるのかと思ったのですが、NHKが触らせないらしいです、なぜか知りませんけれど
も。「すこやか長寿」の方は、1時からはじまるのですかね、しかし、打合せは「9時半
に来てくれ」と言われました。そういう行事も色々やっておられるので、やはり、もっ
と理解出来るようなPRをしてほしいです。

【農野副部長】

ミニFM局とかはありますか。

【土井企画グループ長】

ないです。

【前中部会長】

色々貴重なご意見をありがとうございました。一応、ご意見を言っていたいたよ
うに思いますが。

【宮本委員】

ここの部会とは関係ないかもしれないのですが、12~13ページの「元気創造都市」の、
「農業、商工業、観光の活性化」と、どこにでもある文章で付け加えられているので
すけれども、農業も商工業も観光も一緒にしてしまっただけの活性化のことを書いているので
すけれども、それぞれに課題も非常に多い問題だと思うのです。農業の後に林業がないの
も問題だと思いますし、観光の問題でももっと積極的に書いてはどうかと思うのです
けれども。どこにでもある文章1行で済ませられるのは困るのだという感じがするの
です。具体的な提案がありませんが、ここは大きなところなので、この程度でいいのかな

という気もするのですけれども。それで、ここは、敢えて、「農林業」ではなくて、「農業」でいいのですか。

【前中部会長】

これは多分単純なミスでしょう。

【土井企画グループ長】

「林」は入らないといけないと思います。

【谷村委員】

感覚的に、9 ページの河内長野の地図を見たのですけれども、おにぎりに見えませんか。「河内長野っておにぎり、おむすびやなあ」と。それならば、今までの話の中で、常に連携ということが大切だということで、お互いに結びあうというかなど。ですから、私達の分野では、保健、医療、福祉の連携が非常に大切だと思っていますし、例えば、障害者の方に対する場合でも、保健や福祉、教育の関係機関、団体や医療機関との結びつき、連携が大切かなと思いました。

【前中部会長】

多分、これを完成した後、色々な形で市民の方に伝える時に、1つのキャッチコピーのようところに、1つの物語をつくってやってみたいというお話かと思います。

【井上委員】

今のお話で、私たちの会は、直接的には福祉の方の窓口ですけれども、やはり、子ども達もいるということで、行政と民間との協働というのもありますけれども、行政の中での連携がなかなか難しいなと感じることが多いので、その辺りも考えていただければと思います。

【農野副部長】

ちらっと聞いた話なのですが、今、会社員の講演デビューが流行っているのです。講演会です。大学の先生の話聞いても面白くないので、企業で働いている人が講師として登録し、トレーニングを受け、講演会に呼ばれて忙しくされている方もいます。パイロットをされている方など、色々な人たちの話を聴くことが今、流行りつつあると聞きます。それで、今、おっしゃられたように、人を資源と考えた場合、農林業、商工業、観光だけでなく、地域の人と人を結んでいくようなまちの活性化も十分考えていますよね。ですから、「農林業、商工業、観光」だけではでなく、コミュニティの保健、福祉の活性化、人的資源の活性化に取り組み、まちの活性化を図るという点も足していただきた

と思います。恐らく、これは経済という観点から見て、「農林業、商工業、観光」と書いておられるのでしょうかけれども、コミュニティの中でも経済が発展するというので、そういう会社員が講演会に出掛けて行って講師料をもらうのです。そこに経済が発生するのです。

【岡林委員】

今のところなのですけれども、農林業のところ、私も最初から少し気になっていたのですが、言葉はこれでいいと思うのですけれども、もうちょっと具体的なことを挙げていただいたらいいのではないかと思っていました。知り合いの方からもインタビューしていたのですけれども、ここは自然環境に恵まれた土地であるということと、沢山おられる団塊の世代の方を活かして、眠っているような土地とか、そういうところで、自分の趣味などを活かして、色々なものをつくりたい人はつくる、パソコンをしたい人はするなど、1つのチームみたいなものをつくって、活躍して広め仲間を増やしていく。そのような中で、コミュニケーションが生まれますし、健康を保ち、ハツラツと生きていけるという風なことを行ってほしいと思います。ある市では、少し補助を出したりしながら、ほとんどボランティアで少しの会費で活動していて、だんだんと広めていき、とても活動的というか、いきいきと地域の人たちが参加していているということも聞きました。河内長野市には恵まれた環境がいっぱいありますので、それを活かしながら、そういうことも取り入れていただければと思いました。この辺に具体的な形で出していただけたらなと思いました。

【前中部会長】

できるだけ河内長野の独自性を表現するという、河内長野の環境や住んでおられる方の特質を活かしながら住むということをごにこに入れてという。

【岡林委員】

そこでつくったものを売ったりして潤っているという話も聞いております。そういうことを取り入れていただければ。

【前中部会長】

ありがとうございます。いかがでしょうか。

【高橋委員】

言葉の問題なのですけれども、ボランティアの活動が大事だということなのですけれども、11ページの「協働のまちづくり」のところ、行政からのボランティアの自立支援について、読み取れないということではないのですけれども、ちょっと言葉はよくわ

からないのです。はっきりと、「ボランティア活動支援の充実」と書いた方がいいのではないかと思うのですけれども。「協働のまちづくり」の下から2番目の辺りにそのようなことが書かれているとは思いますが。

それから、12ページの「環境調和都市」で、先ほどから問題になっています、産業の振興ですね。農業、商業、観光の活性化の話がありましたけれども、後の産業の活性化なのでも、極端なことを言うと、とても大きなことをドンと、環境負荷が高いと記述することも考えられるわけですね。ですから、環境負荷の低減というのと商工業の活性化のバランスをとるということも大事なのではないかと思うのです。確かに、箱物をたくさんつくと、その時点では仕事は潤うと思うのですけれども、それで本当に持続的に地域が潤うのかというと、ちょっとまた、別の問題のような気がするのです。その辺をどこかに書かれた方がいいのではないのでしょうか。

【前中部会長】

それでは、時間も参りましたので、色々ご意見をいただきました。多分、まだ抜けているということがあるかも知れませんが、それはまだ、これから修正する機会が、全体会議でございます。一応、部会としては、前回の第4回、本日の第5回でこれまでということにさせていただきたいと思います。これを基に、正副部会長会議で部会の状況を報告させていただいて、それを元に修正等させていただくということになります。今までの部会での議論を反映した形での「基本構想素案」を新たに作成し、それを次回の審議会までに事務局で準備していただくこととなります。事務局の方、よろしくお願いたします。それでは次回の審議会の日程について、事務局よりご説明いただきます。

【土井企画グループ長】

第4回の審議会になるわけでございますけれども、日程的には、3月5日の土曜日から、3月13日の日曜日の間の土日のいずれかで開催させていただきたいと思っております。今後、日程の調整をさせていただいて、できるだけ早い時期に文書でご案内させていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いたします。

【前中部会長】

次回の審議会の日程について事務局より、説明がございました。以上で、本日予定されておりました案件の協議を終了いたします。第5回河内長野市総合計画審議会、調和と共生のまちづくり部会はこれで終了とさせていただきます。長時間、運営にあたりまして、ご協力をありがとうございました。